

式　辞

十勝を襲つた嵐もようやく收まりました。ここ十勝の肥沃な大地によく春の兆しが見え始めてまいりました。4月になれば遅かつた北の地に眩（まばゆ）いばかりの緑が鮮やかに芽生え始める事になるでしょう。待ち遠しい限りであります。

さて、この良き日に真宗大谷派宗務総長・里雄康意（さとお こうい）様代理、北海道教区駐在教導でいらっしゃいます中西志香（しこう）様をはじめとし、多くの御来賓の方々をお迎えして、平成26年度帯広大谷短期大学第54回卒業証書・学位記授与式を挙行できますことは、私ども帯広大谷短期大学にとりまして、誠に喜ばしいことであります。

さて、この度卒業を許可された総合文化学科24名、生活科学科地域社会システム課程7名、同栄養士課程35名、社会福祉科子ども福祉専攻48名、同介護福祉専攻30名、計144名の学生諸君、御卒業おめでとうございます。皆さんにはそれぞれ学科専攻の所定の単位を取得し、本日ここに卒業というハレの舞台に臨むことができたのです。二年間の皆さんのがゆまぬ努力に対し、心から敬意を表するとともに、お祝いを申し上げたいと思います。

日本は今多くの課題を解決できぬまま、喘（あえ）いでいます。皆さんのような若者達には大変申し訳ないことですが、今の社会の中心で活躍している人たちの解決し得ない課題が、皆さんに引き継がれることになってしまふのです。少子高齢化の問題、経済の問題、そして昨今様々な痛ましい事件の報道でもおわかりのように、すさんだ人間の「心」の問題。これらは日に日に悪くなつていくように見えます。

とりわけ、「心」の問題は深刻です。人のいのちをなんとも思わずに戦略だけで奪い取る、ストレスがたまつたといって、相手を傷つけるなど、他者の尊厳があつさり奪われてしまっている、そんな現状に驚き、そして嘆くことしかできません。

さて、そんな厳しく先の見えないこの社会に、今まさに船出していく皆さんに対し、私から【はなむけ】の言葉を二つ送りたいと思います。一つは「いのち」の価値についてです。皆さんはこの二年間、本学で多くのことを学んきました。また、色々な方々と交流し、視野を広げてきたと思います。帯広大谷短期大学は申すまでもなく、浄土真宗・親鸞聖人の「み教え」を建学の精神としています。それは「いのち」の価値を知り、大切にする、ということに尽きるわけですが、実はそんなに簡単にこの「精神」が理解できるわけではないのです。例えば、自らの怒りが他人に向いた時のことを想像してみてください。

私たち人間は、それでもその人の「いのち」の尊厳を守り続けなければいけないのです。しかし、どなたでもお分かりだとは思いますが、実際、そうたやすく納得できるはずはないのです。そんな風にどうしても「いのち」の軽重を時と場合に応じて、都合のいいように振り分けてしまう私たちですけれども、それでも光り輝く圧倒的な「いのち」の存在に、時として出会うことがあります。

皆さんには唯一無二の絶対的存在としての「いのち」と実習現場やボランティア活動などで出会い続けた2年間だったのではないでしようか。短大生活にあって、実習や講義のなかで皆さんはおそらく「いのち」にまつわる光り輝く言葉や行為と関わり、より深い世界を体感することができたのではないでしようか。それこそが、この二年間の学びで得た一番大切な宝物だったのではないか、と思っています。ぜひ、これからも「いのち」とは何か、といつた人間にとつて、とても大切だけれども、極めて厄介な問題に真正面から挑み続けてください。これが一つです。

もう一つです。皆さんには、これから社会人としてそれぞれの道に飛び出していくことになるのですが、どうか後悔しないように生きるのだという覚悟で頑張つてもらいたいと思います。じつはそれでも人間は、後悔をし続ける存在なのです。過去を意識し続けることができる、すなわち記憶を保持できる能力のある人間であればこそ、その呪縛からは絶対に逃れることはできないのでしょうか。作家・重松清氏に「流星ワゴン」という小説があります。家庭が崩壊し、人生に絶望している一人の男が、なぜだか幽霊の親子の運転するワゴンに乗つてしまい、過去のターニングポイントに戻り、やり直すというファンタジーです。もつとも、やり直した過去であつても、結局現在に戻れば、ほとんど何も変わつていなかつたという厳しさも見せつけられるわけです。テレビドラマ化もされて、皆さんもご覧になつたかもしれません。つまりは、今を精一杯生きること、どのように生きても後悔はするけれども、それでもより良い方向を信じて、生き抜くしかないこと。そんな思いがこの小説の狭間から滲んできます。

皆さんには、これから節目節目で厳しい選択を迫られることがある、と思います。

その時に、どうか、一生懸命可能な限り考えて、納得して道を切り開いてください。それでも、後悔は、きっとするでしょう。しかし、考え抜いたという事実だけは残ります。考え抜いたという事実にだけには「後悔」はない、そういう生き方をしてください。悔いなきよう考え方続けて欲しいと願っています。

以上、この二点が、皆さんにお話したかったことがあります。

本日こんなに多くの御来賓の方々、そして保護者の皆さんのがお祝いに駆けつけてくれました。このような形で門出を祝福してもらえるのは、本当にありがとうございました。思えば、皆さんには色々な人たちの支えがあつて始めてこの場に立っているはずです。皆さんのことの本気で考えててくれた人たちが数多くいたという事実に思いを馳せてください。感謝してください。そしてそのことに、幸せを感じてください。その感受性があれば、今後の皆さん的人生は間違いない

く豊かになつていく、と思います。今、人間社会では、多くの大事な「もの」を次世代につなげていくことの重要性が問われていると思います。今皆さんに受けた幸せや恩義は、次世代に返していかなければなりません。自分たちの子供や孫、その他数多くの次に続く若者たちにお返しをすることで、皆さんは人としての義務を果たすことになるのだと思っています。

さて、保護者の皆様に一言お祝いを申し上げます。本当にお疲れ様でございました。いろいろと大変なことが多かつたことと推察いたします。しかし、この日の学生諸君の晴れ姿をご覧いただき、万感胸に迫るものがあるので、と思っています。卒業生は単なる知識以外にも2年間で数多くのことを学びました。「生きる力」も獲得したはずです。社会の荒波にも耐えうるだけの「足腰」の強さ」を自分のものとしたのだ、と信じています。どうか、保護者の皆様におかれましても、安心してこれから彼ら彼女たちを見守つてください。ただ、

そうはいつも、やはり人生です。予定調和で終わるはずもありません。いろいろな場面で、どうしても先達のアドバイスの必要な時が必ずやつてきます。どうか、その時は優しい手を差し伸べてくださいますよう、お願ひ申し上げます。

今、地域社会において若者はとても大切で、期待される存在です。これから時代を作り上げていく旗手になるからです。どうか、卒業生諸君は地域社会のリーダーになるべく、周囲の期待をしつかりと受け止め、帶広大谷短大で学んだ誇りを胸に秘め、元気よく社会に飛び出していってください。私ども教職員は、全員皆さんのお味方です。安心してください。そして、何か辛いことがあつたら戻つてきてください。短大は皆さんがいた時のまま、時間が止まつてここに息づいていることをお約束いたします。

最後になりましたが、本日お集まりいただきましたご来賓、そして保護者の皆様、そしてなにより卒業生諸君のご健勝とご活躍をお祈りいたしまして、私の式辞といたします。

平成27年3月13日

帯広大谷短期大学学長

田中 厚一